

田村喜子

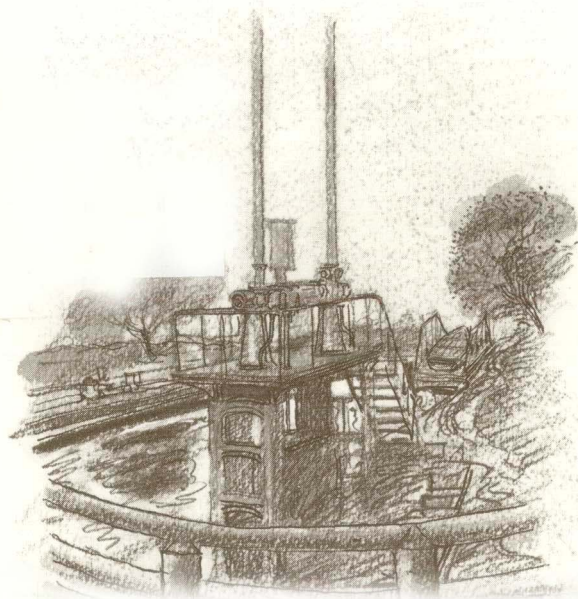
京都インクライン物語



新潮社版

京都インクライン物語

田村喜子





きょうと ものがたり
京都インクライン物語

© Yoshiko Tamura Printed in Japan. 1982

昭和五十七年九月一日 印刷
昭和五十七年九月五日 発行
定価 二二〇〇円

著 者 田 村 喜 子
発 行 者 佐 藤 亮 一

印 刷 東 洋 印 刷 株 式 会 社
製 本 大 口 製 本 株 式 会 社

〒162 東京都新宿区矢来町七十一
発 行 所 株 式 新 潮 社

電 話 業 務 部 (03) 二六六一五一一
編 集 部 (03) 二六六一五四一一

振替 東京四一八〇八番

(「乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付」
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。)

京都インクライン物語

装
画
藪
野
健

序章

京都三条大橋から東へ約一キロ、東海道は東山に遮られる。この辺りは蹴上^{けあがり}という風変りな名称の地で、赤煉瓦の発電所を囲む一帯はつつじの名所にもなっている。

浜大津行きの京津電車がのどかな警笛の響きを残して、右にカーブした勾配をのぼっていく。ここに京のお伊勢さんとも呼ばれる日向大神宮がある。線路端から石だたみの参道をのぼりつめると、こぢんまりした公園の一角に大神宮橋がかかっている。

十歩ばかりで渡り終える石橋の右手には、古代ベネチア様式の洞門から滔々として水の流れ出るのが見える。

暗黒のトンネルから陽光の下に躍り出る濃緑の水は、琵琶湖から約七キロメートルの疏水を経て、いま京都に流れ着いたのだ。洞門に掲げられた石額の篆刻文字「美哉山河」が黙然とこれを見おろす。

京の山はまた霊域である。日向大神宮の鳥居際からゆるやかな山道を辿ると、市の墓所に行きあたる。櫓^{しやう}や線香を備えた墓守小屋に年老いた墓守りが影のようにすわっているほかには人の気配もなく、するどく鳴いて飛び立つ鳥の羽音が山に吸い込まれていく。

そのいちばん奥まったところ、石柵をめぐらした墓碑に、「希英魂永留本市 京都市長」と刻まれているのが目をひく。

「明治十六年 二十三歳ヲ以テ工部大学校卒業、職ヲ京都府ニ奉シ、琵琶湖疏水工事ヲ担当シ

本邦最初ノ水力電気事業ヲ完成ス……」

とノルウェー産御影石に刻まれた碑文に読める。

昭和十九年九月五日、ここからほど近い真如堂町の自宅で八十三年の生涯を閉じた田辺朔郎きくろの墓である。

一般に「疏水」と呼び慣わされている琵琶湖疏水は、明治十八年（一八八五）八月着工され、同二十三年（一八九〇）四月完成した。以来九十余年、琵琶湖の水は京都に流れ続けている。

この水は日本で最初の水力発電を行った。水力発電は明治二十二年当時、世界でもアメリカのコロラド州アスピンのほかには一、二カ所で行われていたに過ぎない。アスペン水力発電所を視察した田辺朔郎は、琵琶湖疏水の最初の計画を急遽変更し、蹴上に発電所を設けて、わが国最初の水力発電を始めた。送電は明治二十四年五月から開始された。最初は百二十馬力の水車四台と、八十キロワットの発電機二台を据えつけた小規模なもので、出力は二百馬力にすぎなかった。しかしアスピンの水力電気が鉱山の家用供給にとどまっているとき、京都では世界にきまづけ魁て、水力発電と電力供給を事業として企画実施したのである。

東山の懸崖には四条のレールを銀色に光らせるインクラインがある。大日山中腹の蹴上舟溜から南禅寺舟溜まで、長さ五百八十二メートル、勾配十五分の一の斜面につけた傾斜鉄道である。疏水を下って来た船は、蹴上舟溜で水と別れを告げる。水は鉄管で水力発電所へ送られる。そして船は積荷のまま車輪つきの船台に載せられてインクラインを下る。南禅寺舟溜からは、同じように積荷を満載した船がのぼっていく。二艘の船は斜面の中間ですれちがう。通過時間は十分から十五分を要した。

「船が山にのぼる！」

棹もささずにインクラインを上下する三十石船に、人々は驚嘆の目を見張った。インクライン

の運転は電力であった。

やがて街には電灯がともし、明治二十八年には日本で最初の電車が走った。

疏水の完成によって、京都は近代都市に生まれ変わった。千年続いた首都の地位を奪われ、衰頹していた京都にとって、水力電気は起死回生の大きな原動力となったのである。

蹴上の第一、第二疏水合流隧道北口洞門には、田辺朔郎の揮毫による「藉水利資人工」（疏水竣工式に於ける明治天皇の勅語から）の文字が刻まれている。明治の大土木事業琵琶湖疏水を象徴することはである。

国家予算七千万円、内務省土木費総額百万円の時代に、琵琶湖疏水は百二十五万円を費した。しかしほとんどの土木事業がお雇い外国人の技術に頼らざるを得なかったこの時期に、疏水工事は日本人だけの手で成し遂げられた。琵琶湖疏水の完成は、いわば土木技術に於ける日本の独立宣言でもあった。その主任技師田辺朔郎の業績は、いまでも土木学界に燦然と残る金字塔である。

京都市は琵琶湖疏水の建設者田辺朔郎に墓所を贈り、その魂の永くこの地にとどまることを希^{こいねが}った。

南禅寺を見おろす東山大日山の赤松林に覆われたこの辺りは、田辺朔郎が疏水ルートを求めて歩きまわった場所でもある。その地を永眠の地と定めて、田辺朔郎はいまも疏水を見守っているのである。

一幕臣の子

慶応四年五月十五日、上野寛永寺に屯集した彰義隊は、大村益次郎の指揮する新政府軍によって潰滅された。この日、昨夜来の雨はなお激しく降り続いていた。官軍の打ちならす太鼓の響きは次第に大きくなり、午前十時ごろ最初の砲声があがった。間もなく上野山下、広小路、池之端、下谷、谷中、湯島天神の辺りに火の手があがり、猛火はすさまじい勢いで一帯をなめつくした。大雨と砲火の中を住民は家財道具を背負い、子の手をひき、東西に走り、南北にさまよい、逃げまどった。

砲撃は夕方五時ごろになって漸く納った。

その夜、江戸の空が不気味に赤く染ったのを、朔郎は鮮明に憶えている。彼は江戸から五十キロばかり北に離れた埼玉県幸手の生蓮寺の縁側から、南の空の燃えるのを見た。

「あの様子なら、江戸は定めし大火でございましょう」

「この先、わたしたちはどうなるんだろうねえ」

母のふき子と祖母の梅想が交わした会話も克明に記憶している。紅炎の江戸の空が、彼らの行末に不安を突きつけていた。

江戸が官軍の手に帰したこの年、田辺朔郎は満六歳だった。

生後一年も経たずに父を失った朔郎に、父の記憶はない。父田辺孫次郎は西洋砲術家であった

と聞かされていた。

田辺家は代々學問を以て幕府に仕えて来た家柄で、祖父田辺石菴せきあんは昌平黌教授や甲府黌典館の學頭をつとめた儒者だった。

当時日本の砲術は火繩銃が主流だった。そのころ長崎では高島秋帆がオランダから銃砲彈藥等を購入して西洋砲術を研究していた。秋帆は天保十二年（一八四一）江戸徳丸原で幕府の御家來を集めて西洋砲術を披露したが、これが田辺孫次郎を西洋砲術の道に踏み入らせるきっかけとなった。

孫次郎は文を棄て、武に走った。

秋帆に師事し、講武所の創設に奔走する孫次郎に対して、日本古来の火繩銃に固執する守旧派は激しく反発した。

孫次郎は幕臣花井彦四郎の娘ふき子と結婚し、長女鑑子てるこが生まれ、三年後の文久元年（一八六二）十一月一日、長男朔郎が誕生した。

だがその翌年の文久二年八月三日、孫次郎はこの年日本ではじめて大流行した異国渡來の麻疹にかかり、四十二歳で世を去った。朔郎は生後わずか九カ月であった。

學問に対する真摯さは田辺家の血筋といえた。朔郎は四、五歳から福地源一郎について英語を学び、大久保政齋から漢文の手ほどきを受けていた。

祖母や母からは常々、武士はいざというときは深く腹を切るものだと言いつけられている。だが朔郎は、腹を切ればどんなに痛いだろうと考えるだけで怖しい。指先のかすり傷に血のにじむのにもめそめそと泣く子だった。

慶応四年が明けた。

「官軍が攻めて来て、江戸八百八町は焼打ちされる」

噂が江戸市中を駆け、江戸脱出を企てる人の群で、町は混乱状態に陥った。

ふき子も江戸を離れようと決心した。孫次郎の亡くなったあとも、守旧派の迫害はなおも田辺家をおびやかしている。そんな折、江戸に騒乱が起れば、その機に乗じて守旧派から危害を加えられることも十分にあり得るのだ。

落ちる先は石菴の門下生であった埼玉県幸手の郷土真中林之助と決めた。

二人の幼い子と姑の梅想、それに中間の山本源七、大島義和のほか二、三人の家僕をつれ、道中旗本の家族と気付かれぬよう粗末な身装に変えて、下谷の屋敷を抜け出たのは春まだ浅いころだった。

電信も電話もない時代のことである。予め連絡する術もなく、一行は幸手を指して江戸を發つた。一刻も早く安全な場所に落ちのびたいと願う心とは裏腹に、住み馴れた土地から逃げ出さねばならない無念の思いが足の運びを鈍らせる。

武士の家など生まれず、田地持ちの子であれば、世の変乱にも主家の興亡にも関係なく、安心して暮していられたのにと、地主のような境遇がこのときの朔郎には羨しく思えてならなかった。

わずか五十キロの道程を、一行は十日近くかかって漸く目的地に着いた。だが目ざす真中林之助の家は野盜に襲われて、林之助は家族ともども菩提所の生蓮寺に難を逃がれていた。やむを得ず一行もこの寺に寄寓することになった。

彰義隊が敗れたのは、それから二カ月目のことであつた。

江戸は平穩になったとの報せを受けて、朔郎たちは数カ月ぶりに下谷に戻った。しかし彼らの住まいのあった一帯は焼野ヶ原と化し、瓦礫の山が胸を突くばかりだった。

江戸の焼ける空を眺めて、ふき子と梅想が抱いた不安は適中した。その夜からの住む家もない朔郎たち一行は、取敢えず長年田辺家の従僕をしていたものの家に身を寄せることにした。

この家での待遇を、朔郎はのちになって、

「江戸に帰り、旧召使たるものの家に投ぜり。然るにこの家の主人は旧恩を忘れ、甚だ冷なりしは、時の人情を写し得て妙なると共に、八歳の子どもによく人心の如何を知らしめたり」

と自伝に書いている。

元の使用人は可成りの生計を営んでいたようであつたが、徳川家が崩壊したいまとなつては、主家の旧恩など一顧の価値もないと考えたのであろうか。それまでの忠義づらをがらりと豹変させて、ことあるごとに朔郎たちを厄介もの扱いした。その態度に、朔郎は幾度か懷中の刀の柄に手をかけたい思いにかられた。そしてそのたびに「あの日」のことが鮮かによみがえり、からだが戦慄した。

あの日、朔郎は極度の恐怖から、思わず刀の柄に手をかけた――。

江戸を立退いて幸手に向う途中だった。目的地まであと一里ばかりだっただろうか。驚の森にさしかかったときだった。一行の女たちをあとに残し、行きさきの様子を聞こうと山本源七に手をひかれ一軒の旅籠屋に立寄った。そこで真中林之助の家が野盜に襲われ、家財を奪われ、家までも焼き払われたことを聞かされた。十日もかけてたよって来た相手の安否さえわからないという。

「あつしがひとつ走り行つて、様子を調べてまいります。坊っちゃまはここでお待ちになつていただきますまし」

源七が言い置いて走り去った。その直後だった。

「外へ出ては危いッ」

と叫ぶ声がして、朔郎は店前の衝立のかげに抱え込まれた。

大勢の荒々しい足音が地面を叩き、猛り狂った叫びが近づいて来た。衝立の上から顔を出すには背がとどかないので横からのぞいてみると、手に手に竹槍やむしろ旗をひっつかんだ二、三十人の男の一群が、目を血走らせて軒先を駈抜けて行くのが見えた。官軍だと口走っている。官軍の名をかたって豪農を襲う野盗だと、朔郎は直感した。昨夜真中林之助を襲ったのも、この連中かもしれない。官軍を名乗るからには、朔郎が幕臣の子とわかれば捕えるにちがいない、と思いつたとき、朔郎は恐怖にかられた。

朔郎は刀の柄に手をかけた。いざというとき、武士は腹を切るものだ、と、下谷の屋敷を出るときにふき子が懷に差し込んでくれた短刀である。

「行く先もまた天下安穩なところなく、一身はおのれ自ら保護するよりほかに途なきとの観念は、わずか八歳ながら覚え得た」のだ。

朔郎は柄を握る手に力をこめた。そのとき、

「おあぶのうございます」

ひきつった声がして、朔郎のからだは旅籠屋の女主人に抱きかかえられて奥座敷にころがりこんでいた。

死を覚悟して柄にかけた手の感触が、なまなましく彼の掌に残っていた。

「満六年六カ月の児童、いざという場合にはこんな真似をするよりも、泣いた方がはるかに有効ならんかなれど、短刀をひっつかんだ瞬間の一幕が児童に自衛ということの奥義皆伝を与えた」と雑誌「児童」//名士の最も著しき幼時の記憶//に書いているほど、朔郎にとって幼年期のこの体験は強烈なものだった。

忘恩の男の仕打ちに齒をくいしばっている朔郎を、ふき子は、

「辛抱おし」

となだめ、大勢が厄介をかけているのだからと、その家の下女のように働いた。

政変が旧幕臣とその家族の境遇を大きく変えていた。馴れぬ母の下女働きの姿を見るにつけ、朔郎の小さな胸には時勢の変化と無念の思いがひろがった。だが逆境はかえって朔郎の精神力を養う要因となった。

間もなく徳川家は田安亀之助（徳川家達）が駿府に封を得て、七十万石の一大名となった。帰参を許された旧幕臣は静岡に移住した。朔郎たちは沼津に移った。田辺孫次郎のただ一人の弟田辺太一が、沼津の兵学校で教鞭をとることになった関係であった。

孫次郎とは十歳も年の離れた太一は、昌平黌時代中村敬宇（正直）と並び称されたほどの秀才だった。中村は福沢諭吉の慶応義塾、近藤真琴の攻玉社とともに私学の三大校に数えられた同人社の校長になった男で、幕臣でありながら維新後は學問で身を立て、高い社会的地位を勝ち得た人物である。

太一は昌平黌卒業後、幕府の外国方に出仕し、外交畑を歩いて来た。文久三年、池田長発を正使とする横浜鎖港談判使節団に随行を命じられたが、

「おれはいやだよ。鎖港なんて、おれの主義に合わねえや」と強固に随行を拒んだ。

太一は熱心な開国論者だった。そのため攘夷派の志士からつけ狙われていた。

西洋砲術の魁となった孫次郎といい、開国主義の太一といい、田辺兄弟は先取の精神が旺盛であった。「隣国（清国）現今の形勢を知るは急務なり」を主張していた父石菴の影響を多分に受けていたのであろう。

攘夷派の攻撃から身をかかわす必要に迫られて横浜鎖港談判使節団の一員としてフランスに渡った太一は、このとき外国奉行支配組頭に昇格した。

フランスに渡ってはみたものの、使節団は鎖港不可能の現状を認識させられたに過ぎなかった。帰国後使節団は幕府に鎖港不可を建言した。その結果、太一は免職、百日の閉門を申しつけられることになった。

慶応三年には駐仏公使向山隼人正の書記官として渡仏したが、パリ博覧会に出品した薩摩藩の処置不手際で責任を問われ、またもや免職処分を受けている。

戊辰戦争が勃発すると、彼は横浜に潜伏してあきんどに身を変えた。函館に籠った最後の幕軍、榎本武揚や大鳥圭介に資金を調達するのが目的であった。

太一の妻己巳子は幕府海軍奉行荒井郁之助の妹で、朔郎より五歳年下の次郎一と、生まれたばかりの龍子ちうこの二人の子がいたが、孫次郎を亡くしたあとの朔郎一家にとっても、太一は杖とも柱ともたのむ存在だった。

沼津にいる太一のところへは、新政府からの使いが足繁く訪ねて来た。彼の外交手腕を新政府に活かしてほしいという迎えの使者だった。

「おれが天朝の禄を食めるかい」

と、にべもなく使者を追いかえしていた太一だったが、明治四年になって漸く腰をあげ、外務省に任官することになった。そして十一月十二日（新暦一八七一年十二月二十三日）岩倉具視を大使とする訪欧米使節団の第一書記官として、汽船アメリカ号で横浜を出発した。

太一の外務省任官で、朔郎たちは沼津を引払い、東京に移った。太一の留守家族は下谷に、朔郎たちは湯島に漸く落ちついた。

朔郎は満十歳になっていた。

二 首都から西京へ

同じころ、京都は文字通り潮の退いたあとの静寂、いや、もっと深い虚しさの中にあった。京都はすでにみやこではなくなっていた。

慶応四年九月八日、年号は明治と改元された。それより先の七月十七日、江戸は東京と改められていた。天皇が京都御所を立ち、天皇親征という名目で東京に向われたのは九月二十日のことだった。

天皇は十月十三日に江戸城に入られ、東京市民に酒をふるまわれた。その量は三千五百六十三樽に及んだ。

思いがけない「天盃頂戴」に、東京市民は家業を休み、山車^{だし}や屋台まで繰り出して酔いしれた。江戸は久しぶりに活気を取り戻したのだった。

この年、明治元年の暮、天皇はいったん京都に還幸された。天皇が京の地を離れていたあいだ、市民は活気をなくし、動揺していた。巷ではこれきり天子様はお還りにならないのではないかと不安の噂でもちきりだった。

そこへ還幸の報せである。市民は随喜した。大年寄、中年寄といった市民の代表が許されて御所南門外から遙かに紫宸殿を拝み、帰洛を奉祝した。町々には酒肴が下された。

しかし翌年三月には、再び東幸が予定されていた。

その日も近づいた三月二日、今度は京都市民に酒がふるまわれた。各町内ごとに、菊の御紋つき御土器も下賜された。

東京市民への酒が、かつての將軍のお膝元、江戸の市民に対して、今後ともよろしくの意味あ